



筑紫女学園大学リポジット

ハリバドラにおける知覚可能なものの非認識と唯識性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河崎, 豊, KAWASAKI, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/89

ハリバドラにおける知覚可能なものの非認識と唯識性

河 崎 豊

Haribhadra on the Non-cognition of Perceptible Objects and *vijñaptimātratā*

Yutaka KAWASAKI

0. はじめに

初期仏教経典が、六師外道の一人としてニガンタ・ナータプッタに言及する例を出すまでもなく、仏教とジャイナ教が、その最初期から語彙の一致や経典内の文章の類似といった、様々なレベルでの要素を共有する事については、多言を要しない。この事実は、両教が同じ土壌の下で批判を応酬し、互いの宗教的思惟を練磨していた状況を十分に想像させる。かかる交流の足跡は、後代のジャイナ教教理文献群では一層顕在化する。尤も、ジャイナ教徒がその歴史上残してきた膨大な文献群における仏教批判の全体像を見渡す事は未だ不可能事に属し、基礎研究としての個別文献の地道な読解と情報の提供は、依然として最重要課題である。

本稿は、白衣派ジャイナ教僧ハリバドラ（8世紀頃¹）著『シャーストラヴァールターサムツチャヤ』（ŚVS）第5章冒頭9詩節の唯識説批判を、自注とされる『ディクプラダー』（DP）、17世紀のヤショーヴィジャヤによる注釈『スヤードヴァーダカルパラター』（SK）も適宜用いつつ瞥見する事で、基礎研究の一端を担う事を目標とする。ハリバドラの知る唯識説及びそれに対するハリバドラの批判²、また他のジャイナ諸論師による唯識批判³については何度か紹介されてきたが、ŚVSは研究対象となった事がそもそも殆どない。今回取り上げる所以である。

1. ŚVSの仏教批判

ŚVSはサンスクリット語で著された計701詩節の小品である。内容は主としてジャイナ教以外の学説の紹介および批判からなる。仏教説は第4章から第6章、詩節では238詩節から476詩節にかけて検討される。唯識批判は主に第5章、375詩節から413詩節にかけてあがる。また付随的に、

空性批判が第6章末尾の467詩節から476詩節にあり、それ以外は、基本的に経量部の刹那滅説に對して批判の矛先が向けられる。

ハリバドラは第4章冒頭でごく簡単に唯識学派の主張と、それに対するハリバドラからの批判の要点を述べる：

jñānamātraṃ ca yal loke jñānam evānubhūyate /

nārthas tadvyatirekeṇa tato 'sau naiva vidyate //240 = 4.3//

〔唯識学派は言う。世界は〕認識のみである。何故なら世間では認識だけが経験され、〔外界〕対象は〔認識と〕別に〔経験され〕ないから。故にあれ（外界対象）は決して存在しない。

atrāpy abhidadhaty anye smaraṇāder asam bhavāt /

bāhyārthavedanāc caiva sarvam etad apārthakam //241 = 4.4//

これに対しても他の者たち（ジャイナ教）は述べる：〔刹那滅であるなら〕想起等があり得ないから⁴、〔また〕まさしく外界対象の感受があるので、故にこの〔経量部説・唯識学派説〕は何れも無意味である。

ハリバドラが理解する限りでの、唯識学派の最大の論拠は、我々が経験可能な事態は認識だけであって、外界対象が認識とは別に経験されない点にある、という事のようなのである。そしてこの記述を受け、第5章冒頭部分では特に「外界対象の非実在」が妥当な認識根拠をもって認識可能か否かを対立軸とし、外界対象非実在説の擁護と批判の応酬が行なわれる。

2. ŚVS第5章第1-4詩節

ŚVS5章前半では、外界の対象が実在するか否かをめぐって唯識学派とハリバドラとの間で応答がある。以下、順次それを確認していこう。

vijñānamātravādo 'pi na samyag upapadyate /

mānaṃ yat tattvataḥ kiñcid arthābhāve na vidyate // 375 = 5.1 //

【ハリバドラ】「ただ認識のみである」という主張も、正当な説明が見つからない。真実の点では、〔外界〕対象の非存在について、いかなる〔認識〕手段も存在しないから。

ハリバドラはまず「外界対象が非存在である」事を認識しうる手段は存在しないが故に、唯識という見解に妥当性はない事を主張する。ところで、ディグナーガ以来の仏教認識論において、仏教徒が正当な認識手段とするのは①知覚 (pratyakṣa) と②推理 (anumāna) だが、ハリバドラはこれら二つとも、外界対象の非存在を認識する根拠たり得ないとする⁵：

na pratyakṣaṃ yato 'bhāvāmbanaṃ na tad iṣyate /
nānumānaṃ tathābhūtasalingānupalabdhitāḥ⁶ // 376 = 5.2 //

①知覚は〔外界対象の非存在についての認識手段では〕無い。何故ならそれは、非存在を認識対象とするものとは認められていないから。②推理〔も認識手段では〕無い。そのようなもの（=外界の非存在）についての正しい証相は認識されないから。

まず、①知覚は実在を対象とする認識である以上、それが非実在を認識する根拠である筈がない。DPによると唯識学派もこの事は承認する：「その非存在を認識対象とする知覚は他〔派〕の者たちにより認められていないから」(54a9: yasmād abhāvāmbanaṃ na tat pratyakṣaṃ iṣyate paraiḥ)⁷。故に、唯識学派が②外界対象の非実在を証明し得るとすれば、推理によってのみ可能となる筈である。しかし、ハリバドラによると、外界対象の非存在と結合しうる証相は存在しないという⁸。ここで唯識学派は、推理が外界対象の非実在を証明する正当な手段であると反論する。そこでの鍵概念は、「認識の条件を備えている事」(upalabdhi lakṣaṇaprāpti, 以下ulp)である。

upalabdhi lakṣaṇaprāpto 'rtho yan nopalabhyate⁹ /
tataś cānupalabdhyai va tadabhāvo 'vasīyate // 377 = 5.3 //

【唯識学派】認識の条件を備えている〔にも拘わらず、外界〕対象が認識されない。そしてそれゆえ、まさに非認識によって、それ（外界対象）の非存在は確定される。

upalabdhi lakṣaṇaprāptiś taddhetvantarasamphatiḥ /
eṣāṃ ca tatsvabhāvatve tasyāsiddhiḥ katham bhavet // 378 = 5.4 //

【ハリバドラ】認識の条件を備えている事とは、それ（認識）の別の〔諸〕原因を具備しているという事である。そして、これら（外界対象）がそれ（ulp）を本質とする場合、それ（外界対象）の不成立が何故にありえよう？

ここでは、ダルマキールティの認識論が議論の基礎である。すなわち、ダルマキールティが正当な推理因とする「結果 (kārya)」「本質 (svabhāva)」「非認識 (anupalabdhi)」のうち、非存在を確定する「非認識」で重要な役割を果たすのがulpである¹⁰。ある対象Aの非存在は、単にそれが知覚されないだけでは確定できない。例えば「壺が見えない」場合、本当に壺が存在しない可能性もあるが、実際には存在するにも拘わらず、認識の他の条件がない — 例えば光がない（暗い）ため、壺は存在するのに、見えないのかも知れない。Aの非存在を確定するには、光や視力といった認識の諸条件を悉く備えていれば必ず知覚する筈であるのに、その知覚されるに違いないAを知覚出来ない事が必要である¹¹。そして、ŚVSのこの記述による限り、唯識学派はこの「知覚可能なものの非認識」という観念が外界対象全般に適用可能であり、外界対象の非存在を論証し得ると見做していたようである。

ハリバドラの反論の要諦は、「認識の条件を備えていれば必ず認識できる」、つまり知覚可能に

も拘わらず認識できない事態を認めない事にあると推測される。しかし、本詩節の解釈、特に代名詞の解釈は微妙である。d 句 tasya については、DPもSKも外界対象を指すとする¹²が、c 句 eṣāṃをDPは外界対象を指すとする¹³一方、SKはそれに加え「別の諸原因」を指すともする¹⁴。当該文脈が外界対象の実在性を問い、かつDPが自注とされる以上、DPの理解に従うのは一見順当である。しかし、eṣāṃ/tasya という複数・単数の代名詞が同一詩節のcd句で同一語を指す事は若干奇妙である。またDPの当該箇所解釈の実在性が疑わしい（→注13）。単数・複数の問題を処理しようとした所産がSKの第二解釈という事はあるが、この付加には、より大きい理由が存在した可能性も考えられる。というのは、ハリバドラは別の著作でulpの問題を異なる議論の中で引き合いに出しているからである。そしてSKはその事実を確実に知っており、それを踏まえて解釈を自身の注釈に付加したのではないか、という可能性である。

2.1 ハリバドラとulp

ハリバドラが仏教との論争においてulpを持ち出すのは、当該文献以外に少なくとも二点ある。一つは『ダルマサングラハ二』(DS) であり、もう一つは『アネーカーンタジャヤパターカー』(AJP)¹⁵である。まず、ŚVSと同じく外界対象非実在説との関連でulpが出現するDSを確認し、次いでulpが異なる文脈で現れるAJPを検討する。

2.1.1 DS におけるulp

DSでは第636-743詩節を一纏まりとして唯識説が検討される。前主張（637-665）のおおよその内容を述べておくと、(1) 極微 (paramāṇu) (2) 極微の集合 (samudāya) (3) 単一な全体 (avayava) 夫々の実在説批判である。これに対するハリバドラの論難も多岐に亘るが、今問題とする直前の議論（675ff.）を略述すると：認識 (vinnāṇa) の性質についてあり得る状態として (1) 専ら把握対象 (2) 専ら把握主体 (3) 把握対象かつ把握主体 (4) 把握対象でもなく把握主体でもない、という4つを想定し、その何れも成立しないと論じる¹⁶。その後、認識は有形象でも無形象でもないという主張に対し、その様な認識はそもそも非存在 (abhāva) で全く空虚な状態だ (savvasunnatā, 688-689) とハリバドラは反論した後、ulpの概念をハリバドラ自身が引用して、外界対象が非存在たる事の不合理性を主張する：

na ya so uvaladdhilakkhaṇapatto jam adarisaṇe vi tā tassa
tadabhāvanicchayo ṇaṇu egaṃteṇa kuto siddho //690//

【ハリバドラ】そして、それ（外界対象）は〔唯識学派にとって〕認識の条件を備えたものではない〔はずである〕。従って、それ（外界対象）が経験されない場合でも、絶対的にそれ（外界対象）の非存在の確定が、何故に成立しよう？

aha so parassa evaṃ tadabhāvo tassa ceva sajjho vi
tuha āyanicchayo kaha ajuttito sã samā ṇaṇe //691//

【唯識学派】 それ（外界対象）は他〔の外界实在論〕者にとってそのよう〔に認識の条件を備えていると認められているの〕である〔から、非实在は確定され得る〕。

【ハリバドラ】 しかし〔その場合には〕、その者（他学派の者）にのみ、それ（外界対象）の非存在が証明され得る〔ことになる〕。たとえそうだととしても、〔外界非实在論者たる〕君に、どうして〔外界対象の非存在に関する〕自らによる確定がある？

【唯識学派】〔外界対象が存在することは〕不合理であるから〔我々に外界対象の非存在に関する自らによる確定がある〕。

【ハリバドラ】 認識において〔も〕それ〔が不合理であること〕は同様である。

ハリバドラの反論は、仏教認識論における「我々がある事物の非存在を推理によって確定できるのは、その事物が経験可能である事に限られる」という前提（→注11）に基づくと推測される。唯識学派が、外界対象をulpを持つものではない、つまり常人では経験不可能（*adrśya*）とする以上、仏教徒は理論上その非存在を確定し得ないではないか、ということであろう。

これに対する唯識学派の反論は、外界实在論者は「外界対象はulpを伴う」と認めているのだから、その考えを仏教徒たちが是認する非存在の確定理論にあてはめれば、外界が非实在である事は論証されざるを得ない、ということであろう。しかし、そのような外界対象非实在論証は、外界实在論者に通用するだけで普遍性を持たず、唯識学派自身がその非实在を確定することはどちらにしても不可能である、というのがハリバドラの再批判の趣旨と考えられる¹⁷。

以上、DSでもulpは外界対象の非实在性をめぐる議論において一定の役割を果たしているが、ŚVSのそれとは若干の相違点を示す。一つは、ulpはハリバドラの方から持ち出す論点であり、唯識学派が積極的にそれを主張するのではない点である。これは、「外界対象は認識の条件を備えていない」と唯識学派が認める事とも関連しよう。これを認め、かつダルマキールティの認識論に基づきつつ、ulpとの関連で外界非实在を論証するのは元来不可能な筈だからである。この点、「ulpであるのに外界対象が認識されないので、外界対象は存在しない」と唯識学派自身が主張するŚVSとは、一見相違を示す如くである。但しŚVSでもハリバドラは、後に唯識学派をして「他学派を意図して*parābhiprāyato*」(382a=5.8a)これまでの議論が行なわれた旨を語らせている。ŚVSでは、ハリバドラは、「勝義では外境を知覚不可能なものと捉えるが、まず外界实在論者の土俵に立って論証しようとする者」という構想の下、唯識学派を描いているようである。

2.1.2 AJP におけるulp

AJPでは、ulpは唯識批判を行なう5章ではなく、主として刹那滅批判を行なう6章に出る。既に指摘される通り¹⁸、そこでulpの絡んだ議論内容は外界対象の实在性云々ではなく、因果関係の確定に関わる事である。一方、AJPとŚVS第5章の冒頭8詩節とでは、議論の外部構造自体一つつまり使用される鍵語彙およびその出現順序自体は緊密に対応する事が注目に値する。以下、その点を中心に確認したい。

仏教側は、因果関係の確立手段の定義として「因果関係は知覚と非認識を確立手段とする¹⁹」というHB4.2の記述を引用する。次に、実際に因果関係の確立方法の教証として引用するのが、PVSV 22,2-3 = PVin II p.85,11.6-7の「あるものたちが認識されると、それ（認識）の条件を持っている〔が今まで〕認識されていなかったAが認識される。そこで〔それらのうちの〕一つであるBが存在しない時に〔Aが〕認識されない場合、AはBの結果である²⁰」という一文である。対してハリバドらは、「こんなことはあり得ない。認識されるものは経験されるから。認識されないものは経験されないから」(AJP II p.178: yat kiñcid etat upalambhasya darśanatvāt anupalambhasya cādarśanatvāt)と反論する。ハリバドらにとっては、(an) upalambhaと (a) darśanatvaとは等価であり、「そこからはみ出たものはここでも非存在」(AJP II p.178: tadatiriktasya cehāpy abhāvād) である。これに対する再反論として仏教側が取り上げるのが、ulpである：

nābhāvaḥ, upalabdhiḥlakṣaṇaprāptānupalambhasya darśanād dṛṣṭasya cādarśanāt / na, upalabdhiḥlakṣaṇapāptasya anupalambhāsiddheḥ / upalabdhiḥlakṣaṇaprāptir hy upalambhapratyayāntarasākalyam / teṣām upalambhajananasvabhāvatve katham tadānupalambhaḥ ? / atatsvabhāvatve vā tatpratyaḥāntaratvaṃ katham //

【仏教徒】「存在しないわけではない。認識の条件を備えている〔にもかかわらず〕認識されないものは経験されるから。そして〔かつて〕経験されたものが経験されないから。」

【ハリバドら】「そうではない。認識の条件を備えているものが認識されない事など成立しないから。何故なら、認識の条件を備えているという事は、認識〔を生み出す、対象以外の〕他の条件を完備しているという事である。それら（他の諸条件）が認識を生み出すことを本質とするなら、何故にそれ（認識の他の条件を備えているもの）の非認識があろう？あるいは、〔認識を生み出す他の諸条件に〕それ（認識を生み出すこと）を本質とすることがないなら、どうして〔認識を生み出す〕別の条件性があろう？

AJPの当該箇所におけるハリバドらの反論が、ŚVS第5章冒頭の記述と並行関係にある事は明らかであろう。しかしAJPでは、ŚVSの如く外界対象全般の存在・非存在は争点でない。そして、ulpという語が使用される元々の仏教認識論的な文脈を鑑みると、AJPの如き議論の場にulpが現れるのは、ŚVSに比してより自然なもののように見える。また、AJPにおけるこの様な言明をSKは熟知していた故に、自らの注釈に第二の解釈を付け加えた可能性は高いであろう。

3. ŚVS第5章第5-7詩節とAJP

ŚVSとAJPの並行関係を、更に確認しておこう。まずŚVS379=5.5では、以下の様な唯識学派からの反論と、それに対するハリバドらからの再反論が提示される：

sahārthēna tajjananasvabhāvānī cen nanu /

janayaty²¹ eva saty evam anyathātatsvabhāvātā // 379 = 5.5 //

【唯識学派】【外界】対象を伴って〔初めて、別の諸原因は〕それ（認識）を生み出すことを本質とする。

【ハリバドラ】〔もしも〕この様であるなら、〔別の原因が認識を〕必ず生み出す。そうであれば、〔別の原因は〕それ（認識を生み出すことを）を本質とするものでないことになってしまう。

DPおよびSKによると、唯識学派の議論の根拠は「論理の主張者 (nyāyavādin)」の、「〔ulpとは、認識の他の条件全体と〕特定のものの自体と〔双方を具備する事〕である。〔特定のものの自体とは、〕別の認識の諸条件が存在する時、そのものの自体が存在すれば必ず〔その〕知覚が生じる〔ものである〕」だが²²、これはNB2.13-14である。これに対するハリバドラの反論も、先と同様に「ある対象がulpである以上、それを知覚できないことはあり得ない」という点から為されていると考えられる。そしてその事は、以下のAJPにおいて、ulpの議論の後にNB2.13-14を教証とした仏教徒の反論と、ハリバドラによる再反論からも明らかである：

AJP II p.179

sahārthēna tajjananasvabhāvāni, yathāha "svabhāvaviśeṣāś ca yaḥ svabhāvaḥ satsv anyeṣūpalambhapratyayeṣu san pratyakṣa eva bhavati"/

etad apy asāram, ittham apy ubhayasya upalabdihlakṣaṇaprāptīśabdenābhidhānāt tadbhāve cānupalambhāyogāt /

【仏教徒】【外界】対象を伴って〔初めて、別の諸条件は〕それ（認識）を生み出す事を本質とする。『〔ulpとは、認識の他の条件全体と〕特定のものの自体と〔双方を具備する事〕である。〔特定のものの自体とは、〕別の認識の諸条件が存在する時、そのものの自体が存在すれば必ず〔その〕知覚が生じる〔ものである』』と述べるように。

【ハリバドラ】これも中身のない〔議論である〕。かくあるとしても、〔認識の他の条件と特定のものの自体の〕双方はulpという語を用いた表現〔である以上、ulpである事に変わりはない〕から。そしてそれ〔ら両者〕が在る時に認識がないのは理に合わないから。

但し、ここでも対応関係は明白だが、そこで議論されている内容は、AJPでは外界対象一般ではない事は注意しなければならない。

さて、379=5.5を受けた、ŚVSにおける、唯識学派の再反論とハリバドラの応答は以下の通り：

yogyatām adhikṛtyātha tatsvabhāvavakalpanā/

hantaivam api siddho vaḥ kadācid upalabdhitāḥ // 380 = 5.6 //

anyathā yogyatā teṣāṃ katham yuktyopapadyate /
na hi loke 'śvamāṣādeḥ siddhā paktyādiyogyatā//381= 5.7//

【唯識学派】〔別の諸原因の〕潜在的能力を考慮して、そ〔の認識を生み出すこと〕を本質とすることが想定される。

【ハリバドラ】何と！そうだとすると、どこかの時点で〔対象の〕認識があるのだから、君たちにとって〔外界対象は〕成立している（380）。さもなければ、それら（別の諸原因）の潜在的能力に、どうして論理的説明がつくのか？というのも、世間では、〔硬くて如何なる時にも軟化を生み出すことがない〕アシュヴァマーシャ豆²³などに、軟化（pakti）等の潜在的能力は成立しないから（381）。

なぜ唯識学派は「潜在的能力」を考慮できるのか。ある原因Aの潜在的能力が考慮できるということは、考慮する以前に、過去の或る時点で、「潜在的能力を持った条件を備えた、実在するA」を認識していなければ考慮などできないはずである — というのが、ハリバドラの言わんとする点であろう。一方、「潜在的能力」の議論は、AJPにおいては外界対象一般ではなく、直前のNB2.13-14に現れるsvabhāvavīṣeṣa「特定のものの自体」の知覚可能性を巡って出現する：

AJP II p.179f.

na tadā tadbhāva eva, apī tu vidyamānaḥ pratyakṣo bhavatīti cet, katham tāni tadupalambhapratyayāntarāṇi/saha tena tajjananasvabhāvāt tvāt tathocyanta iti cet, katham na tadā tadbhāvaḥ, abhāve vā saha tena tajjananasvabhāvāni/taddrīyatvena yogyatā²⁴apekṣayeti cet, katham upalambhābhāve na tv²⁴ etadadhigatiḥ/

【仏教徒】その時、他ならぬそれ（特定のものの自体）は存在しないが、しかしなお、知覚は見出されつつあるのである。

【ハリバドラ】〔特定のものの自体が存在しないのに〕何ゆえそれ（特定のものの自体）の認識の別の諸条件があろう？

【仏教徒】それ（特定のものの自体）を伴ってそ〔の、述べられた認識〕を生む本質があるので、このように述べられている。

【ハリバドラ】その場合、それ（特定のものの自体）の存在が何ゆえ無いであろう？あるいは、〔特定のものの自体が〕存在しない場合、それ（特定のものの自体）を伴ってそれ（認識）を生む本質を持つ諸々の〔認識の他の条件〕が、何ゆえ存在しえよう？

【仏教徒】それ（特定のものの自体）が知覚可能であるので、潜在的能力を考慮することによって〔、上のように述べられている〕。

【ハリバドラ】どうしてなのか？認識が非存在の場合、これ（特定のものの自体が知覚可能であること）の理解など、決してない。

再度ŚVSに戻ると、唯識学派は、これまでの主張が実は外界实在論者の意見に合わせたものだった、という弁明を行なう：

parābhiprāyato hy etad evaṃ ced ucyate na yat /
upalabdhi lakṣaṇaprāpto 'rthas tasyopalabhyate // 382 = 5.8 //
atadgrahaṇabhāvaiś ca yadi nāma na gṛhyate /
tata etāvātāsattvaṃ na tasyātiprasaṅgataḥ // 383 = 5.9 //

【唯識学派】 実に、他〔学派＝外界实在論者〕を意図して、この事が以上のように言われている〔のであるから、我々の考えに問題があるわけではない〕。

【ハリバドラ】〔それは〕違う。何故なら、認識の条件を備えているならば、〔外界〕対象がその〔他学派の〕者によって認識されるから (382)。そして、それ (外界対象) の把握を本質としない〔別の諸原因〕によって、もし実に把握されないなら、その時、これだけ〔の理由〕で、それ (外界の対象) が存在しない事はない。過大適用ゆえに (383)。

唯識学派は、「認識の条件を備えた外界対象が認識されない」という考えは他学派の意見に基づくものだという²⁵。しかし他派の者は、そもそも認識の条件を備えたものについては必ず認識可能である事を承認するのだから、外界対象は成立する事になるのである。なお、この反論と再反論は、先に述べたDS690 (→2.1.1) を裏返したかの如き構造を有している。また「過大適用の過失」については、ab句の内容からすると、外界対象の認識を本質としない内的な認識でのみ適用可能な事象 (例えば夢見) を、外界対象の認識・非認識に拡大解釈しているという事かと考えられる。

以上、ŚVSとAJPの間には、ulp → saharthena tajjananasvabhāvāni → yogyatā と、議論の展開自体は完全に並行関係にあるが、扱われる論題は相違する。ulpが認識論の文脈で本来出現するものである事を考慮すると、AJPでの扱われ方が自然ではあろう。ŚVSの如く、唯識学派が現実の論争の場で、ulpを論拠として、限定条件下における特定の事物の非存在 (「地面に壺が無い」という様な) ではなく、外界対象全般の非存在を論証しようとした事例があるのか — つまりこの議論がハリバドラのいわば創作、想定問答だった可能性も考慮する必要がある²⁶。この点、仏教文献でulpを絡めた — しかも、唯識学派が「外界实在論者の土俵に乗り、あえてulpを持ち出して外界対象の非实在を論証する」という筋書きでの — 外界対象非实在論証が存在するか否か、またハリバドラ以前・以後のジャイナ教、あるいはヒンドゥー教で、ulpを絡めて唯識批判をする者の存在の有無を精査する必要がある。

4. おわりに

以上を回顧しつつ今後の課題を述べて結論とする：

- ŚVS第5章の冒頭9詩節では、外界対象の非实在を確定する根拠の有無という点から唯識批

判が展開される。

- そこでは、ulpが外界対象の实在・非实在を確定するための鍵概念として登場する。
- ŚVS以外に、ulpを争点とした仏教との議論は、AJPとDSに見られる。特にAJPとŚVSは議論の展開及び使用語彙において緊密な対応関係を示すが、AJPにおいてulpは因果論の確定をめぐる一連の議論の中で出現し、論点自体がŚVSと相違する。
- 今後の課題として：①ŚVS第5章の残余の諸詩節における唯識説批判の検討²⁷ ②ulpを関連させた外界対象非实在論証が仏教文献に後づけ得るかの調査 ③ハリバドラ以前・以後のジャイナ教、もしくはヒンドゥー教において、ulpを関連させた外界対象非实在論証への批判が存在するか否かの調査、をひとまず挙げておきたい。

【謝辞】

本稿の着想は、平成23年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（研究代表者：宇野智行博士／筑紫女学園大学准教授）による研究会の場で得たものである。その後、宇野博士には数々の貴重資料をご提供賜り、更に宇野博士と小林久泰博士（筑紫女学園大学人間文化研究所リサーチアソシエイト）からは、ご専門の立場より多くのご教示を賜った。ここに記して深謝致します。

なお本稿は平成23年度人間文化研究所客員研究員助成費による研究成果の一部である。

【一次文献および略号】

- AJP Anekāntajayapatākā.
H.R.Kāpadīā, *Anekāntajayapatākā by Haribhadra Sūri with His Own Commentary and Mūnicandra Sūri's Supercommentary*, 2 vols. Gaekwad's Oriental Series 88,105, Baroda, 1940,1947.
- DP Dikpradā by Haribhadra. →ŚVS [3]
- DS Dharmasaṅgrahaṇi.
Kalyāṇavijaya, *Śrīmad Haribhadrasūrivivacitā Ācārya Malayagiripraṇīṭayā Ṭīkayā samalaṅkṛtā Dharmasaṅgrahaṇi*, 2 vols., Śreṣṭhi Devacandra Lālabhāi Jainapustakoddhāra granthāṅka 39 & 42. Mumbai, 1916.
- HB Hetubindu.
Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Hetubintuḥ*, 2 vols. Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Süd-und Ostasiens 4-5. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1967.
- NB Nyāyabindu.
Dalsukhbhai Malvania, *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottaraṇī: Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*. Tibetan Sanskrit Works Series 2. Patna: Kashiprasad Jayaswal Research Institute, 1955.
- PVin Pramāṇaviniścaya.
Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapters 1 and 2*. Beijing - Vienna : China Tibetology Publishing House & Austrian Academy of Sciences Press, 2007.
- PVSV Pramāṇavārttikasavṛtti. Raniero Gnoli, *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the First Chapter with the Commentary, Text and Critical Notes*. Serie Orientale Roma 23. Rome, 1960.

- ŚVS Śāstravārtāsamuccaya.
- [1] Śriharibhadrāsūrikṛtagraṃthamālā (Śāstravārtāsamuccaya, Śaḍdarśanasamuccaya, Aṣṭaka). Bhāvnagar: Śrī Jainadharmaprasāra Sabhā, 1907.
- [2] Śāstravārtāsamuccaya with the Commentary Syādvādakalpalatā by Yaśovijaya. Śreṣṭhi-Devacandra Lālābhāi-Jainapustakodhāre Granthāṅka 16, Bombay, 1914.
- [3] Śāstravārtāsamuccaya with the Auto-Commentary Dikpradā by Haribhadra. Bombay: Goḍijī Jaina Upāśraya, 1929.
- [4] Śriharibhadrāsūrigraṃthasaṅgraha (Yogadṛṣṭisamuccaya, Yogabindu, Śodaśaka, Śāstravārtāsamuccaya, Śaḍdarśanasamuccaya, Dvātriṃśad, Aṣṭakaprakaraṇa, Lokatattvanirṇaya, Dharmabinduprakaraṇa, Hīṃsāphalāṣṭaka, Sarvajñasiddhi). Ahmedabad: Śrī Jainagranthaprakāśakasabhā, 1939.
- [5] Śāstravārtāsamuccaya with the Commentary Syādvādakalpalatā by Yaśovijaya and its Hindi translation. Bombay: Divyadarshan Trust, 1979.
- [6] Ācārya Haribhadrāsūri's Śāstravārtāsamuccaya (With Hindi Translation, Notes and Introduction). Tr. by K.K.Dixit. L.D.Series 128 (22), Ahmedabad: L.D.Institute of Indology, 2002. (1st edition: 1969)
- SK Syādvādakalpalatā by Yaśovijaya. → ŚVS [2]

【二次文献および略号】

安藤 嘉則

(1984a)「ハリバドラスーリの唯識説批判」『印度学仏教学研究』32-2, 144-145.

(1984b)「唯識性論証に関する一考察 —Anekāntajayapatākā と Tattvasaṃgrahaを中心に—」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』16, 63-86.

Balcerowicz, Piotr

(2005) "Akalaṅka und die buddhistische Tradition: Von der Nichtwahrnehmung von Unsichtbarem (*adr̥śyānupalabdhi*) zur Allwissenheit," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* XLIX, 151-226.

原田 泰教

(2007)「*Anekāntavādapraveśa*及び*Anekāntajayapatākā*の写本について」『南アジア古典学』2, 167-181.

林 慶仁

(1996a)「Nyāyakumudacandraにおける唯識説批判」『論叢 アジアの思想と文化』5, 94-124.

(1996b)「Prabhācandraの理解する唯識学説 —saṃvedana論証の側面—」『印度学仏教学研究』45-1, 190-192.

稲見 正浩 (Inami, Masahiro)

(1987)「ダルマキールティにおける「因果関係の決定」」『哲学』39, 131-147.

(1999) "On the Determination of Causality," Shoryu Katsura (ed.), *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on India and Tibetan Philosophy: Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference Hiroshima, November 4-6, 1997*, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften, 131-154.

Kellner, Birgit

(1998)「upalabdhi lakṣaṇaprāptiについて」『印度学仏教学研究』46-2, 111-114.

(1999) "Levels of (Im)perceptibility: Dharmottara's Views on the *dr̥śya* in *dr̥śyānupalabdhi*," Shoryu

Katsura (ed.), *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on India and Tibetan Philosophy: Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference Hiroshima, November 4-6, 1997*, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften, 193-208.

(2003) "Integrating Negative Knowledge into *pramāṇa* Theory: The Development of the *dṛṣyānupalabdhi* in Dharmakīrti's Earlier Works," *Journal of Indian Philosophy* 31-1/3, 121-159.

森山 清徹

(1990a)「後期中観派とダルマキールティ (2) — 「空」を巡る論争 : LakṣaṇaśūnyatāとSvabhāvānupalabdhi」
『佛教大學研究紀要』74, 27-64.

(1990b)「後期中観派とダルマキールティ (3) — 無自性論証と推理 (anumāna) —」『人文學論集』24, 7-33.

沖 和史

(1992)「インド大乘仏教思想における外界实在論批判の特色」『佛教万華 種智院大学学舎竣工記念論文集』京都: 永田文昌堂, 129-154.

PSM Pāiasaddamahāṇṇavo. Sheth, Hargovind Das T., *Pāia-sadda-mahāṇṇavo: A Comprehensive Prakrit-Hindi Dictionary*. Delhi, 1928.

宇野 惇

(1983)「ジャイナ教の仏教批判 — スヤードヴァーダマンジャリー第十六偈 —」『南都仏教』50, 79-95.

Van Den Bossche, Frank

(2007) *Elements of Jaina Geography: The Jambūdvīpasamgrahaṇī of Haribhadra Sūri*. Delhi: Motilal Banarsidass.

渡辺 俊和

(2002)「Dharmakīrtiの非認識論 — 相反関係を中心に —」『南都仏教』81, 54-80.

Williams, Richard

(1965) "Haribhadra," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 28-1, 101-111.

¹ ジャイナ教史上複数のハリバドラが存在した事については、Williams (1965) の先駆的な研究がある。Van Den Bossche (2007:4-17) はWilliams (1965) を踏まえ、4名のハリバドラについて概観する。本稿のハリバドラの年代については8世紀中葉の人とする説が主流だが、インド思想史における幾多の論師の年代論と同様、これは幾分相対的である。彼が引用する諸論師の年代論如何で前後する可能性はあり、また彼自身に帰せられる諸作品のauthorshipは今後の研究に俟つところが多く、その結果如何でも年代は前後しよう。本稿ではAJP, DP, DS, ŚVSを全て同一人物の著作と見て扱うが、これは無論将来に訂正される可能性を含んでいる。

² 安藤 (1984a) (1984b) 等。

³ 宇野 (1983)、林 (1996a) (1996b) 等。

⁴ これは238ab = 4.1ab及び239 = 4.2で述べられる経量部説に対する批判である。

⁵ 因みにDS740-741では、外界対象の非実在性を承認した場合に佛陀の布施波羅蜜を認識する根拠があり得るか否か、をハリバドラは議論し、知覚も推理もその認識根拠たり得ず、従って布施波羅蜜など成立しない旨を述べている。

⁶ ŚVS [6]のみ-anupalabdhitaḥ -anupattitaḥとするが、その読みを採用する理由は述べられていない。

⁷ SK (169a6) : 「知覚は独自相を認識対象とするから」(adhyakṣasya ca svalakṣaṇāmbanatvāt).

⁸ DP (54a10) : arthābhāvapratiḥbaddhasādhuliṅgādarśanāt 「〔外界〕対象の非存在と必然的關係を持つ正しい証相が経験されないから」; SK (169a7) : arthābhāvapratiḥbaddhasādhuliṅgānupalambhāt. 「〔外

界] 対象の非存在と必然的関係を持つ正しい証相が認識されないから」。なおこの様な批判は、中観派が「一切法が無自性であることは知覚でも推理でも証明できない」と論難される事を想起させる (cf. 森山 (1990a) (1990b))。

- ⁹ yan nopalabhyate については、刊本によっては yenopalabhyate ともある。DP (54a11) は yan nopalabhyate と読む一方、SK (169a10) は yenā kāraṇena, upalabdhiḥlakṣaṇaprāpto 'rthaḥ bāhyo ghaṭādiḥ paranityopalabhyate として、DP と SK の間でも相違する。SK の伝承に基づくなら、当該詩節は「知覚の条件を備えているならば、[外界] 対象は認識される [はずだが、その対象が認識されない]。そしてそれゆえ、正に非認識に基づいて、その [外界対象の] 非存在が決定される」といった訳になろう。この箇所では、「知覚の条件を備えているにも関わらず対象が認識されない」ことが鍵である事は確かであり、その点では yenopalabhyate より yan nopalabhyate の方が一元々の伝承かどうかは措くとして一文脈の流れは理解しやすい。
- ¹⁰ Kellner (1998) (1999) . 因果関係の決定における「非認識」の位置づけについては、稲見 (1987) (1999) を主として参照した。ダルマキールティの「非認識」概念についても多くの研究があるが、例えば Kellner (2003)、渡辺 (2002)、および其処で引用される諸二次文献を参照されたい。
- ¹¹ ダルマキールティによれば、我々が存在・非存在を確定できるのは知覚可能なもの (dṛśya) である。知覚不可能なもの (adṛśya)、例えば距離が隔絶していて認識できない須弥山、時間が隔絶していて認識できない未来王シャンカ、一般人には認識できない悪鬼 (ビシャーチャ) 等は、その存在を絶対的に否定することも肯定することもできない (渡辺 (2002:57))。つまり、我々が存在・非存在を確定できるのは、限定的な状況下に限られる。なおこの点について、脱稿直前に Balcerowicz (2005) を知った。本論文は知覚不能ものの非認識 (adṛśyānupalabdhi) の概念を空衣派ジャイナ教論師のアカランカ (ca.720-780) 諸著作に探り、それをディグナーガやダルマキールティとの関連で議論したものである。従って本稿とも関わる部分があるが、今回は十分に活用できなかった。
- ¹² DP (54b1) : tasya rūpopalabdhasyārthasya[ed.: rūpopalambhasy-]...; SK (169b5) : tadasiddhiḥ bāhya[^]asiddhiḥ.
- ¹³ DP (54a12-54b1) : (eṣāṃ ghaṭādīnām ca tatsvabhāvatve upalabdhiḥlakṣaṇaprāptatve ... 但し、この箇所は校訂者によって丸括弧内に収められている。ŚVS[3] における丸括弧の使用は説明されていない為、確かな事は言えないが、この一文は校訂者の作文の可能性もある。
- ¹⁴ SK(169b4) : teṣāṃ ca tadaparābhīmataghaṭādyupalambhakānām tatsthānābhīkṭapratyayāntarānām vā.
- ¹⁵ AJPの姉妹編・要約版とされる『アネーカーンタヴァーダプラヴェーシャ』について、原田 (2007:167) によると同書に瑜伽行派を論駁する章は存在しない。なお当論文の入手に際しては、名和隆乾氏 (大阪大学大学院博士後期課程) の手を煩わせた。
- ¹⁶ 同じ視点からのハリバドラによる批判は、ŚVS 391-392 = 5.17-18i にも見られる。
- ¹⁷ 最後のハリバドラによる答論、「認識でも同じ」の意図は、外界対象の実在性が合理的でないなら、それと同じレベルで認識の実在性も合理性を持たないことを認めなくてはならない、という事か。692詩節では「外界対象が〔認識を〕生むことをあり方として持つ場合、諸認識の〔領域において〕矛盾は成立しない。さもなければ、〔認識が〕非存在という結果になってしまう。そして〔認識が〕成立するなら、何ゆえそれ (外界対象) が存在しないであろう?」(na ya ṇaṇa viroho siddho atthassa jaṇayatabbhāve / gammati iharābhāvo siddhīe ya kaha tao natthi //) とある。
- ¹⁸ Kellner (1999:197, note 13). 但し箇所の指摘のみ。
- ¹⁹ AJP II p.176: pratyakṣānupalambhasādhanāḥ kāryakāraṇabhāva ity.
- ²⁰ AJP II p.176f.: yeṣāṃ upalambhe tallakṣaṇam anupalabdham upalabhyate ... tatraikābhāve 'pi nopalabhyate tat tasya kāryam.

- ²¹ ŚVS [2] のみ janayanty とあるが、これは誤植ではなくSK(170a1)も "kṛpte 'py arthe janayanti janayeyus(ī) tāny arthopalambham" 「〔外界〕対象が概念構想されているものである場合でも、それらが〔外界〕対象の認識を janayanti 「つまり」生み得る」とある。
- ²² DP (54b2-4): sahārthena bhavatparikalpitena tajjananasvabhāvāni arthopalambhajananasvabhāvāni pratyayāntarāṇi, yad āha nyāyavādi svabhāvaviśeṣaś ca, yaḥ svabhāvas tatsūnyeṣūpalambhapratyayeṣu sat pratyakṣa eva bhavati⁴ itī cet.; SK (169b10-170a1): sahārthena paraparikalpitena tajjananasvabhāvāni arthopalambhajananasvabhāvāni pratyayāntarāṇi, yad āha nyāyavādi svabhāvaviśeṣaś ca yaḥ svabhāvaḥ satsv anyeṣūpalambhapratyayeṣu san pratyakṣa eva bhavati itī; tathācārthasya kṛptatvāt tatsāhitye nārthopalambhajananasvabhāvātvaṃ viśiṣṭaṃ kṛptam ity āśaya itī cet.
- ²³ aśvamaṣa は諸種の梵語辞典に見出し難い。DP は kaṅkaḍukākāsādinām、SK は kaṅkaḍukādeḥ と説明する。Cf. PSM s.v. kaṅkadua. 今はPSMに依った。
- ²⁴ 校訂者によると na tv に対して nanu という variant がある。
- ²⁵ この「他派を意図した」言明が何を指すかについては、両注釈とも「認識の条件を備えている外界対象が認識されない」という、最初の主張と理解する：DP (54b13) parābhiprāyataḥ bāhyārthavādy-abhiprāyeṇa⁴ etad evaṃ ced ucyate yad upalabdhilakṣaṇaprāpto 'rtho nopalabhyata itī.; SK (170b3-4) parābhiprāyataḥ bāhyārthavādi-Naiyāyikādy-abhiprāyataḥ hi niścitam etad evaṃ ucyate yad uta upalabdhilakṣaṇaprāpto 'rtho nopalabhyate itī.
- ²⁶ インド大乘仏教における外界実在説批判の特色については、沖（1992）が至便である。なお、沖論文では特に ulp を絡めた唯識性論証（とその批判）については言及されない。
- ²⁷ ŚVS384 = 5.10以降は、①認識が「自己認識」であることに基づく唯識性証明と、それに対する批判 ②認識の自照性および認識は目的語を取らないという主張に基づく唯識性証明と、それに対する批判 ③唯識の下では輪廻と解脱に区別がつかなくなるというハリバドラからの論難と唯識学派からの反論、およびそれに対するハリバドラの再批判、が主に議論される。

（かわさき ゆたか：人間文化研究所 客員研究員）